

1 本稿の目的 — インタビュー英語を使った話し言葉研究の意義

本稿は、インタビューの英語を使った話し言葉の言語学的な観点からの研究である。実際のインタビューを録音して、それを文字化するためには、音声学、音韻論、狭い意味での文法、意味論といった知識を利用することが必要になる。さまざまなインタビューを文字化したものを手に入れることはできるが、第2節で見るように、英語の研究資料としては、問題が多い。研究の目的に添った資料は、結局は研究者が目的に合うように収集しなければならない。本稿は文字化作業に関する問題に始まる、話し言葉研究「序説」である。

自然な話し言葉を研究することは容易ではない。語用論 (pragmatics) の一分野に、会話分析 (Conversational Analysis) がある。その基本的な研究手法は、まず自然な会話を録音し、それを文字化することに始まる。それをもとに、会話の中に見られるさまざまな規則性を見い出そうとするものである。会話分析は、自然な話し言葉を文字化する作業を促進し、話し言葉の文字化の技術も進歩してきた (e.g., D. Tannen, *Conversational Analysis: Analyzing Talk Among Friends*. Ablex, 1984)。この技術を利用して、インタビュー英語を実際に文字化し、話し言葉の実体を見ることが、本稿の第一の目的である。

会話は、原則的には、参加者が発言する権利は平等に保証されている。従って、会話の分析をしてみると、規則的な *turn-taking* (話し手と聞き手の入れ替わり) が起こること、*adjacent pairs* (挨拶には挨拶、質問には答など) などがその特徴としてみられるといったことが報告されている (cf. S. C. Levinson, *Pragmatics*, Cambridge University Press, 1983: 303ff.)¹⁾。これに対して、インタビューは、前提として聞き手と答え手で話が進むわけであるから、本質的には会話とは異った性質をもったものであることが予想できる。語用論的な観点から、会話とは違ったインタビューの性質を見ることが、本稿の第二の目的である。

2 言語資料 — 話し言葉と書き言葉

話し言葉は、単に音の連続だけからなるのではなく、イントネーション、ストレス、ピッチといった音韻的なさまざまな道具を駆使し、また、電話での会話は別として、顔の表情などの非言語的な情報を盛り込んで、書き言葉とは比較にならないほど豊かな内容を直接に聞き手に伝達することを可能にする。しかしながら、話し言葉は、何らかの形で文字化しなければ研究対象にすることはできないし、研究報告にもならない。文字化するということは、とりもなおさず、音声的、音韻的、韻律的に豊かな情報を多かれ少なかれ捨ててしまうことになる。役者は、文字として書かれた言葉としての台詞を、音声的、音韻的、韻律的な情報と、動作表情を加えて話し言葉として表現するのとちょうど逆である。

実際に音声言語を文字化して出版されたのを見ると、多くの場合、内容そのものが重要であり、言語そのものが問題になることは少ないので、内容が正確に伝達できるように、

表現を変えることはごくあたりまえに行われている。英米の新聞・雑誌のインタビュー記事を見ると、多くの場合、well, you know といった、いわゆる談話辞(discourse particle)は記録されていないし、言い替え、言いよどみもすべて削除されていると考えられる。

これに対して、日本の英語学習者のためにインタビューを文字化したものは、内容よりもむしろ言葉に重点をおいているために、談話辞も含んでいるし、音の脱落も一部記録されている。言い誤り、言い直しなどはかなり正確に記録されているという点で話し言葉に近い。その例を見てみよう。

EJ If you could (if you could) give (er) advice to (er) the European commonwealth and President Clinton and (er) whoever will be the next prime minister of Japan (bo-)...

Thurow Well, it's the advice that [I'm gets the advice today], you know (that, you know) the right way to [what I] think about it is that the world today is in this position like they were between 1945 and 1950. The old system's gone away, the old enemy's gone away. How do you build a new system and what's your vision for it?

EJ So we need to sit down.

Thurow Yeah. And (and) see that, you know, a lot of the vision for the old system was containing communism and creating wealthy democracies. Well, we succeeded in creating wealthy democracies. We succeeded in containing communism. Now we've [we] got a very different world. Your vision for the next 50 years can't be containing communism, there's nothing to contain. Your vision for the next 50 years can't be building (weal-) wealthy democracies, they're here.

EJ So you've [you] gotta talk about distributing income which is something ...

Thurow Well, you gotta talk about something, whatever. (**EJ**: Right. **Thurow**:)Whatever.

(Leser Thurow with Eric Morrison, EJ ON TAPE, *English Journal*, March, 1994)

録音テープと比べてみると、談話辞はすべてが記録されているわけではない。沈黙(silent pause), er といった filled pause, 舌打ち、ストレス、スピードといったものは記録されていない。引用の中で、() で示した部分は発話にはあるが記録されていないものである。また、下線部は誤りで、[] で示したのが正しい。わが国で英語学習者のために出版されているインタビューを文字化したものは、このような点からみると、学習目的には問題ないが、英語の語法、文法の研究のために、無批判にデータとして利用することは問題がある。

CNN などのニュース番組の caption は別にしても、こういった、インタビュー番組の caption は、すべての言葉を書き取ることが不可能であることから、いわば、内容をできるだけ伝えるといった、ニュース番組とは違った concept で作られると考えてよい。このように、音声言語の文字化は、さまざまな種類がある。研究の目的によって記述の種類を決めてゆかねばならない。

3 LKL の分析

3.1 発話者と発話速度

今回文字化し、分析の対象としたのは、1994年2月7日(日本時間)放送の"Larry King Live"を録音・録画したものである。この放送分には caption がついているが、実際に筆者が記録したものとこの caption を比べてみると、かなりの食い違い、省略、言い替えが見られる^{※2}。interviewee は次の通り: Jeremy Greestock, British diplomat (UK); Alexay Semeiko, Russian diplomat (Russia); Leon Panella, Budget Director; Senator Jim Sasser (New Mexico); Senator Pete Domenici (Tennessee)。

記録のための convention を述べておく。特に be 動詞、冠詞、前置詞、代名詞といった機能語、および wanna, lemme といった慣習化された異形は、現れたときにはその異形を文字化した。= は、unfilled pause, == はやや長い unfilled pause, ... は途中で言葉をさえぎられたことを示す。small capital は、特に強い stress を表す。??? は、他の発言者と重なったために聞き取りが不可能な部分を、hh, h-h, など は溜息のような、強い顕著な呼気を表す。

総語数は 45501 (ポーズ、舌打ち(ts)などすべて一語として数えている) で、時間は 38 分17秒。この番組は 3 部に分かれ、第一部は Greenstock, Semeiko の外交官、第二部は Panella、第三部は, Sasser, Domenici の両上院議員のインタビューである。その間に、電話による視聴者の参加、大統領の演説の一部、一般の人のインタビューなどが含まれる。Larry King とその他のゲストの総発語数は 36,579 で、平均して一秒間に 17.6 語の割である。文字化したもの全体は、本稿のサイズでは 20ページ以上にわたる。

さらに、一人一人の一秒あたりの発語速度は、King が 17.6 語、Greenstock が 18.4 語、Semeiko は 14.2 語、Panella は 19.5 語、Sasser は 15.2 語、Domenici は 18.8 語の割である。native speaker でない Semeiko が一番遅いのは当然として、南部の Sasser は、やはりスピードが遅い(Southern drawl)ことが裏付けられている。

全体的にもっとも特徴的なことの一つは、談話辞や、(filled and unfilled) hesitation pauses が多いことである。well 26; you know 9、hesitation は、filled pause (er) が 223、比較的短い unfilled pause が 41、比較的長い unfilled pause が 8 ある。filled pause の er は、前の語の子音と連結(linking, liaison)を起こすことが多く、英語学習者の聞き取りを困難にする原因となる。また、言いよどみ、言い替えが見られ、英語学習者が、言葉にこだわりながら聞いていると、混乱する原因になる。若干例をあげる。

(1) I think Pete ough' to take some credit for tha', because we worked together = in nineteen ninety fashioned tha', that er agreement, er, started the deficit coming down, 's accelerated by wha' we did er, last year, this president did er, in nineteen ninety-three.

民主党の Sasser の発言である。わかりやすく書き直すと、I think Pete ought to take some credit for that, because we worked together in 1990, and this year fashioned that agreement which started the deficit coming down, which (=the fact that the deficit started coming down) was accelerated by what we, or rather, this president did last year. ということになるであろう。話の流れの中で、先行詞を受ける関係詞が省かれるのはよくある。

(2) The most, er, the, the largest, er, wha' the president himself characterizes as the largest social spending program since, er, social security is not included in this budget.

これは、番組の出演者の発言ではなく、別にインタビューされた人の発言である。言い換えると、Social security, which the president himself characterizes as the largest social spending program, is not included in this budget. ということになるだろう。social security という表現がなかなか出てこなかった結果であると思われる。後で、3.4 で見るように、このような例は、決して、文法が混乱しているわけではない。むしろ、頭に浮かんだ言葉を中心にして、文法的に文を組み立てようとしているのである。文頭の、the most は、the most important といった表現を予測させる。また、the largest social spending という表現が頭に浮かんだが、それが、自分の考えではなく、大統領の考えであることを言う必要を感じたためにさらに、複雑な言い替えが行われたと思われる。

3.2 語彙

いわゆる機能語の中で、and がそのまま語尾の破裂音を発音している方が少なく、an' が 95 回、and が 43 回の割合である。この 43 回のうち、多くがロシア人の発言と、母音の前に and がきた場合である。機能語ではないが、慣用的に縮約される可能性のあるものと、それが縮約されていないもの数をみると、wanna が 11、want to が 7、gonna が 26、going to が 7、have/ has got が 3、've/ 'as/ 's got が 8、got が 8 という割合である。発話速度の速い Panella がもっとも多く縮約形を使っている。

話者は、政治的な事柄を難しい言葉を使いながら話しているが、いわゆる俗語、口語といった語句が頻出する。例をみてみよう。

(3) And David Owen an' Thorvarld Stoltenberg have been *going hammer and tongs* day and night over this with great determination.

go hammer and tongs は、かなり口語的なくだけた表現とされるが、英国のトップレベルの外交官の言葉として出てきているのは興味深い。

3.3 音声

音声的な面から特徴を見ると、同化(assimilation)の現象が著しく見られる。定冠詞の"the"の発音で the が 176、thi が 70、同化して na になったものが 6、さらに from に同化して mi になったものがある。ちなみに、代名詞の "that" も na' となっているものが 4 つある。わが国の英和辞典をみると、大半が the の発音について、母音の前が thi、それ以外では the となるとしているが、母音の前は例外なく thi であるのに比べ、それ以外ではほぼ自由変異 (free variation) といえる。不定冠詞の "a" についても、ey と発音されたのが 11 あり、特に冠詞を強調する必要がない場合でも、ゆっくり話す Sasser によく見られる。

上に見たように、連結も多く、went の t が脱落し、n が次の up と連結した例が見られる：

(4) I, I am on medicare, er, and my medicare bill *wen' up* over ten percent this year. If I'm paying over ten percent, er, what is the problem?

3.4 語法・文法

言いよどみ、言い替えが多くあるために、話し言葉は文法的に不正確であるような印象があるが、実際は、一見破格と見えるものも文法規則によって簡単に説明できる。一部は、(1)(2)の例についてみた。第 2 節でみた資料の中の、

(5) Well, *I'm gets the advice today*, you know that, you know, what I think about it is that ...

のイタリックの部分は、一見文法に合わないように見えるが、I'm (the person who) gets the advice today ... のように、() 内の先行詞+関係詞が省かれたものである。文法は、コミュニケーションの最も基本的な屋台骨である。

語法的な面から見ると、native speaker でない筆者には珍しいものがある。若干の例を見る。

(6) CALLER 1: Er, this afternoon I heard, Bi-, er, President Clinton say that er, he ha-, er, medicare was going to cost ten percent more this year. Is that true?

PANELLA: Er, ten percent, that's, er, that's righ'. We're seeing an inflation increase and a cost increase on medicare programs *tha'*, whereas inflation righ' now, as you know well, is somewhere less than three percent, er, health care is going up at abou' ten percent.

イタリック部の *tha'*(=that) は、*so that* と解釈すれば理解しやすい。話者の Panella が、最初から *that = so that* を意識していたかどうかはわからないが、結果的にそう解釈できる。

(7) I, I think that er, the likelihood is you're gonna get, er, someone on the left who are gonna complain about the cuts in programs, as I said, low-income fuel assistance but er, we'll get some complaints from the right as well. *I think is always*, er, a budget er, hopefully will bring together the center and er, we'll get it passed.

この *I think is always* の部分は、*I think, as is always, er,...* といった解釈をするとわかりやすい。「いつものように、結局は中道寄りがまとまって、予算が通過すると思う」といった意味である。

(8) Well, actually, I, I think it really serves a purpose *took* to be on here tonight an' talk about this budget.

took は、標準的には *taken* であるはずのもので、詳しく言い換えると、*to be taken* であり、「今晚ここに連れてこられて、この予算について話し合うというのは目的にかなっている」といった意味である。

(9) Er, wh-, what do you *mean* "your medicare bill wen' up"?

まさに、*by* などなくても意味は明瞭である。*caption* では無意識に（と推測するが）*by* が挿入されている。

(10) LARRY: Wha', tomorrow is what? *Tomorrow is committees, right'?*

PANELLA: Tomorrow I have the committees.

「明日は委員会だ」といった日本語に共通した表現が、口語では可能であることを示す例である。

3.5 Larry King の話術

本研究者の研究目的とする、インタビュー英語の語用論的な考察結果の一端をまとめて述べる。"Larry King Live" が特に人気があるのは、やはり進行役の話術のうまさにあると考えるのが正当であろう。インタビューアーのありかたとして、King 氏がもっていると考えられる原則をあげると次のようになるであろう。インタビューアーが、やたらとしゃべるインタビューがあるが、役割についての認識の相違の反映である。

A. Be brief (Let the interviewee talk as much as possible)

King 氏の発言の多くの部分は、インタビューを開始する前の解説と、終わりの次回の予告的なものが大半で、質問そのものは極めて簡潔である。第三部の最初の部分の King 氏の発言をあげる。いずれも短く、簡潔なものばかりである。

(11) How much of this is gonna go through, Jim?! Really?! Are you saying this i' a budget either side might 'ave come up with?! Since you are regarded in that category, Peter, Senator Domenici, how do you feel?! I hope so./ Period?! So are you i' favor o' this?! And you're, you're gonna, you're gonna fight him in what area? といった具合である。

B. Be provocative (Be challenging, and instigate the interviewee to talk)

発言をうながすために、かなり挑発的である。例をあげる：

(12) GREENSTOCK: Thi meeting of European ministers today was looking for three things, I think: one, more muscle = to be used in Bosnia. Secondly,

LARRY: *Verbal muscle.*

GREENSTOCK: Or physical muscle, let's see.

セルビア軍に対す空爆をすることの必要が焦点であるが、一向に実行のめどが立たない。話し合いばかりであることを、「口の筋肉」と言って皮肉っているのである。

C. Be friendly (It depends on who the interviewee is, but create friendly atmosphere)

インタビューした五人全員に対して、first name で常呼びかけることによって、親しみを増している。

4 結語

以上見たように、わが国で使われている英会話などの教科書はもちろん、映画の台本なども、自然な会話とは相当に違った性質をもっていることがわかる。話し言葉は、このように、極めて不完全な言語表現でしかない。書き言葉は、その点、教養のある人が書くものであれば、未完結の文を排し、言いよどみ・繰り返しは避けられている。英会話の教科書や台本は、一種の書き言葉ととらえることもできる。

本稿では、インタビューの英語を文字化することから得た口語英語の特徴を素描し、また、すぐれたインタビューとしての "Larry King Live" の内容を見て、語用論的な観点からの、インタビューの特徴を垣間見た。さらに詳しい報告は別の機会に譲る。

なお、本研究は、筆者の所属する帝塚山学園平成5年度特別研究費の助成によって可能になった。末尾であるが、帝塚山学園に対し謝意を表するものである。

<注>

1 このように、会話分析は、言語使用 (linguistic performance) にかかわる研究である。これに対して、談話分析(Discourse Analysis)は、まとまりをもった、主に書き言葉の一つのテキストの構造を抽出しようとする。基本的には、文がもつような構造をテキストももっているという前提があり、そのようなテキストの構造、あるいは、テキストの「まとまり」(cohesion)といった側面から、人間のもつ言語能力(linguistic competence)の解明に貢献しようとするとする分野であり、語用論とは違った基本概念のもとで行われる研究分野である。

2 参考のために、Larry の冒頭の発話の筆者の記録 (i) と、caption の同じ部分を、一切手を加えることなく、そのまま (ii) としてあげておく。(i)(ii) の相違は明白であろう。

(i) **LARRY:** And it is Senator Domenici, an' not Senator Deconcini. Until this weekend, the tragedy in Bosnia was the global political equivalent of = bad weather. Everybody talked about i' an' nobody did anything about i'. Tha' may now be changing. Thi impetus of the wholesale slaughter o' civilians Saturday in a Sarajevo marketplace. The culprit's not known, bu' NATO now says it will consider airstrikes in na Wednesday meeting. The U.N. Secretary General wants to see it happen an', he's backed today by none other than President Clinton. How does the rest of the world feel? Nations of influence are still deeply split over Bosnia. = Jeremy Greenstock is Charge D'affairs at the British Embassy here in Washington. Alexay Semeiko is political counselor for European, European affairs at the Russian Federation Embassy here in Washington as well.

(ii) **LARRY:** It is Senator -- not Senator Deconcini. Everybody talked about the situation in Bosnia and nobody did anything about it. The slaughter of civilians Saturday in the marketplace. NATO will consider airstrikes. The U.N. Secretary General wants to see it happen. He was backed by President Clinton. How does the rest of the world feel? Nations of influence are still deeply split over Bosnia. Jeremy Greenstock is Charge d'Affairs in Washington. This man is in charge of European affairs at Russian Federation Embassy here in Washington as well.